

## 《調査報告》

# 上八金山跡の現状調査報告

上野 禎一

湯川山（471m）の北西山麓、宗像市上八地域にはいくつかの金山の狸掘り跡が存在している。平成28年12月26日に地元の猟師さん（占部雅彦氏）の案内で、福岡石の会副会長の中武俊郎氏、宗像大社文化財管理局の砂場一明氏、宗像市郷土文化課の灘谷辰生氏、坂本雄介氏の協力を得て現地調査を行った。県道502号線から東に900m程の距離にある承福寺の境内に集合し、林道を北東方向に四輪駆動車で登りながら本谷池・野口池の付近を散策し、3カ所で坑口の存在を確認した。それらの位置を図1中の●印で示す。発見順に、坑口①、坑口②、坑口③と本報告では名付けた。その後、平成29年3月11日に、福岡教育大学の学生2名と共に、3カ所の坑口に赴き、坑内の測量および地質調査を行った。それらの結果について以下に報告する。

### 地質および鉱床

鉱床母岩は、中生代白亜紀前期（約1億2千万年前）に堆積した関門層群の上部層である下関亜層群の安山岩質砕屑岩と下部層である脇野亜層群の砂岩・頁岩からなる堆積岩である。それらに熱水石英脈が貫入し、銅鉛鉄亜鉛及び金銀鉱を運鉱した熱水鉱床で、その金銀鉱を掘る目的で、江戸時代から昭和にかけて地元の坑夫さん達により狸掘りがなされたと考えられる。

### 坑口の確認と内部測量および地質調査

(1) 図1に示すように、林道湯川線から沢に降り、あみだ川沿いにある廃屋の近くに[坑口①]を見出した。廃屋周辺の写真を図2に、坑口の写真を図3に示す。

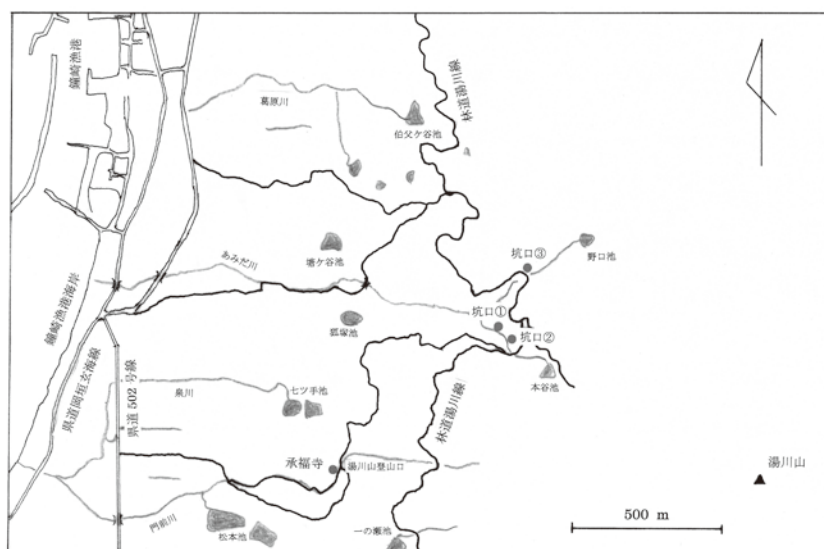


図1 上八金山狸掘り跡の位置図



図2 廃屋付近



図3 上八金山 坑口①

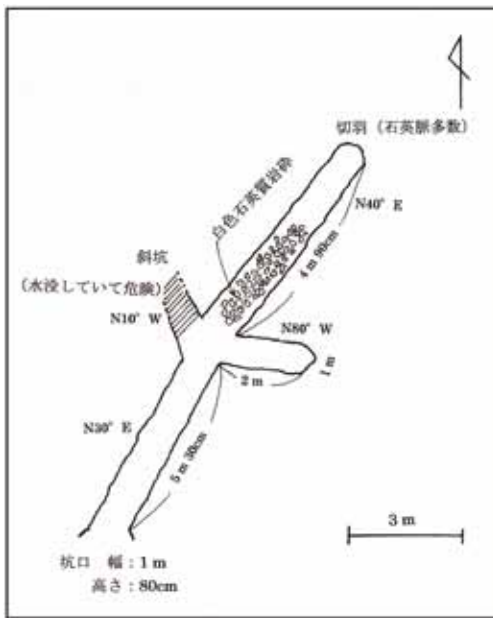


図4 坑口①の坑道測量結果



図5 本坑道

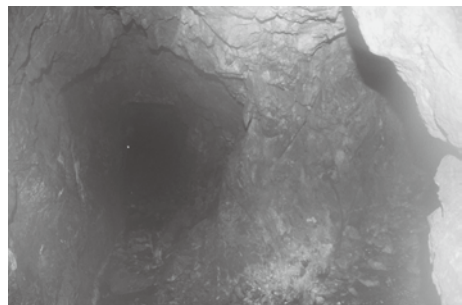


図6 分岐点

毒蛇やイノシシ等の危険生物が居ない事を確認した後、坑口より入り込み、測量と地質調査を行った。測量の結果を図4に示す。

それによると坑口の横幅は約1 mで、高さは80 cm程で、一人がやっと入れるくらいの坑道が伸びている(図5)。坑口より5 m 30 cmの所で3分岐しており(図6)、右側は、N 80° Wの方向に2 m程伸びて採掘を止めている。真ん中が本坑と思われるが、走向N30° E ~ 40° Eの伸びで、11 m 20 cm程続いている。左側は斜坑となっており、N10° Wの方向に伸びているが水没しているため、危険なので入り込まない方が良い。本坑道には少量の水が流れており、白い石英質の硬い岩砕が散在している(図7)。本坑切羽の写真を図8に示す。白い石英脈が数本写っており、この石英脈に沿って掘り進み金銀鉱を採掘したと思われるが、現在この石英脈中には、金銀鉱は無論、黄鉄鉱・黄銅鉱・閃亜鉛鉱・方鉛鉱等の硫化鉱物さえも見られない。また、入り口近く左手には排水路と思われる穴があり落下防止と思われる木枝が渡してある。母岩は脇野亜層群の砂岩・頁岩と思われるが、風化が進



図7 本坑道下盤



図8 本坑切羽の石英脈



図9 坑口②



図11 坑口③

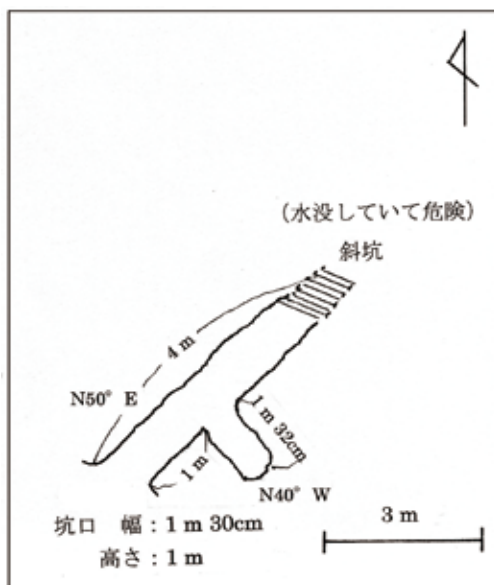


図10 坑口②の坑道測量結果英脈

み鉄分が酸化し赤褐色となっており非常にもろくなっている。

(2) 「坑口①」から小川に沿って15m程南東に進んだところに「坑口②」を発見(図9)。当時は大きな穴と思われるが、谷部にあるため、ほとんどが埋まっている。何とか入り込み、測量を行った結果を図10に示す。坑口の横幅は約1 m 30cmで、高さは低く1 m程で、一人がやっと入れるくらいの坑道が走向N50° Eの伸びで、4 m程続いているが、先は斜坑になっている様で、水が溜まっていて危険である。坑口より1 m程の所からN40° W方向に1 m 32cm程横に掘られているが、先端は切羽となっているので、ここで採掘は終わっているようである。ここも坑壁に白い石英脈が数本伸びており、これを掘り進んで、金銀鉱を採掘したと思われるが、金銀鉱は無論、黄鉄鉱・黄銅鉱等の硫化鉱物も見られない。この母岩も脇野亜層群と思われ、岩質は硬く黒色の珪質泥岩であるが、表面は風化を受け鉄分が酸化して赤褐色を帯びている。

(3) 一旦林道に出て、180m程北に行った野口池への沢沿いに「坑口③」を発見(図11)。

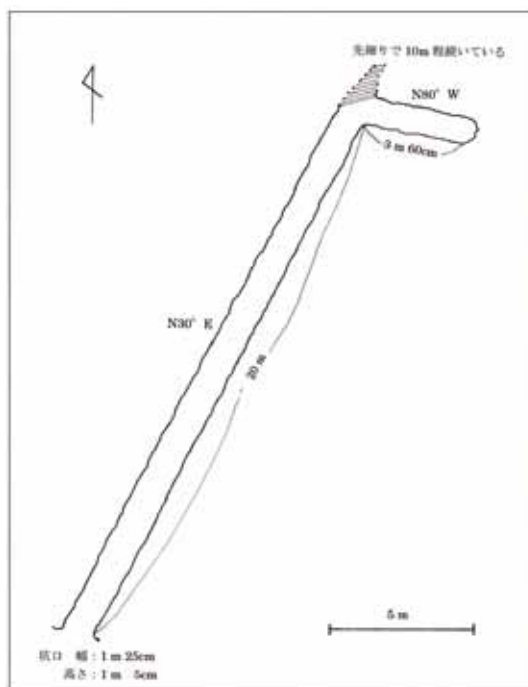


図 12 坑口③の坑道測量



図 13 坑道側面の石英脈

ここも何とか入り込み測量を行い、その結果を図12に示す。

坑口の横幅は約 1 m 25cm で、高さは約 1 m 5 cm 程で、二人が入れるくらいの坑道が走向 N 30° E の伸びで、30m 以上続いている。この岩質は硬く黒色の珪質泥岩であった。内部は二人が腰をかがめて交差出来るほどの広さがある（図13）。石英脈が数

本見られ、この石英脈に沿って掘り進み、金銀鉱及び銅鉄鉛亜鉛鉱を採掘したと思われるが、残念ながら現在は硫化鉱物すら見られない。

### まとめ

上八金山狸掘り跡の調査を行い、3カ所の坑口の存在を確認した。いずれも、本坑道の伸びは、N 30° ~ 50° E で、それらにほぼ垂直に横坑道が掘られている。本地域の構造線が、NE-SW系に伸びていると思われ、その弱線に沿って地下から熱水石英脈が貫入し、その熱水に含まれていた銅・鉄・鉛・亜鉛等の金属成分が硫化鉱物として析出し、ときに金銀鉱をも出現させたと思われる。時の坑夫さん達は、より価値の高い金銀鉱に狙いを定め、石英脈を掘り進んだものと思われる。

今回の調査では、坑口および坑道内においては金銀鉱および硫化鉱物等は見い出せなかったが、林道と交わる旧道沿いにズリ場と思われる箇所があり、その転石中に微細な石英脈が存在し、それに伴う小さい黄鉄鉱は確認できた。

どなたか、上八金山周辺で採集された硫化鉱物等を含む鉱石をお持ちの方は、是非、拝見したく思っておりますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

(うえのていいち 自然部会)